

おりがね工房の むしむしピン

カブトムシにトンボ
カエルにヤモリ、サワガニまで
身近にいる生き物たちが
小さなピンバッチになった!

0・5ミリほどの薄さの銅板を糸ノコでむしの形に切り出し、タガネで頭部や胴体部の凹凸をつける。ピンをろう付けして全体を半分折り曲げたら、ペンチで肢をつま先まで細かく調整していく。単なる真っ平な板が、まるで命を持ったかのような「むしむしピン」に生まれ変わる瞬間だ。

作っているのは鶴岡市で「おりがね工房」として活動する山形太一さん。20代半ばで入学した美大の通信教育課程で、1枚の板がみるみる形を変えていく金属加工の面白さに出会い、自ら作るようになった。素材の特徴を生かしつつも金属らしくない表現をしたいと、当初は銅板を折ってつくる鶴などの作品を展開していたが、本物の折り紙と間違われてしまった経験から、ねじったり曲げたりという金属特性を生かした生き物シリーズを始めた。そのクオリティは本物と見間違えるほどのリアルさで、持ち前の技術力の高さと「小さな頃からのお友だち」という生き物への深い愛情を持つ山形さんならではの表現だろう。だがそれゆえに、むし苦手派たちから時に拒否感を示されることとなり、リアルすぎないよう所要所を簡略化したこの「むしむしピン」誕生に至った。

サイズは2〜3センチ。手のひらにのせるとなんだか小さなベットのよう。30分ほどで完成するワークショップも随時開催中とのことで、自分で手がけたむしむしピンならなおさら愛着が湧くであろう。服や帽子、ネクタイなどにつけて一緒にお出かけしたり、どこかにそっと置いて一緒に誰かを驚かせたり。むしむしピンは、きつと毎日を楽しくする小さな相棒となるに違いない。



左のアゲハチョウとトンボは、金属板にガラスを溶かしつけた生き物シリーズの最新作「+ぐるす」。色ガラスの透過性が加わった作品はまさに芸術品。色銀箔が貼られたタマムシもリアルです。生き物シリーズ以外には「甲冑シリーズ」も展開中。作品の見学・購入希望者は直接山形さんにお問い合わせを。「おりがね工房」では作品も展示しています。
おりがね工房 ☎0235-77-4486

(取材・文 長谷川結)